

---

# 僕達の知らない二次元 第1期

中央線次郎

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

僕達の知らない二次元 第1期

### 【Nコード】

N9338Y

### 【作者名】

中央線次郎

### 【あらすじ】

オリキャラを主人公にして多彩なクロスオーバー展開を盛り込みました。ぶよぶよメインですが、他のアニメなど、ゴチャゴチャ感のあるクロスオーバーとなっています。

国語力・文章力・表現力が低く、更新もものすごく気まぐれになる可能性が高いですが、皆様が読んでくださることを切に願っております。

なお、この小説はサイト「ぶよぶよ王国」にて今後掲載予定です。

## 第1幕 2次元への扉

…俺はごくごく平凡な生活を送っているはずだった…

俺は土岐大門、15歳。ごく普通の中学生。周りからは「テツ」というニックネームで愛されている。

だけど、もう俺は中学3年生。受験勉強に励む毎日さ。

俺は学校では勉強も運動もできる人間だと思ってるし、実際そうみたい。え、自慢話にしかなくてない!?

でもいいさ。俺は今幸せな生活をしているから、な。

俺には好きな事が1つある。それが「ぷよぷよ」だ。

あれはキャラも可愛いし、ゲームが苦手の俺が唯一打ち込める落ち物パズルだった。テトリスも好きだけどな。

大好きでならない存在で、受験勉強の合間に息抜きとして毎日プレイしていた。

@@@@

そんなこんなで、夏休みも後半戦。

こんな日でも俺はぷよぷよをしていた。

「うわ、サタンの野郎…」

また、負けた。それでも、楽しいと思えてくる。けれども、俺にはプライドというものがあって、どうしても許せなくて、

「よし、もう1回!」  
とついつい長くなってしまふ癖があるのだ。  
直さないとなあ、受験生だし。

1時間くらいして、ようやく俺はぶよぶよを終えた。時計の短い針が12の文字を指している。今日は受験勉強の続きを諦め、寝ることにした。

(また明日受験勉強に励もう…)

夢から覚めたのは午前の5時。まだ家族の誰も起きていない時間帯だった。  
すると、俺の目に不思議な物体が写ってきた。

「何、これ………」

一瞬、目が壊れてるのではとか、幻覚でも起こしちゃったのだろうか、それともまだ夢の中なんだろうか、とかいろいろ俺は思ったが、結局は本当の出来事であったことにあとで気づいた。

俺は扉の前で立ち尽くした。しかし、謎のドアだ。家族の誰かが勝手に取り付けたものでもないし、ましてや前日にあったものでもない。

何があったんだろう、せつかくだから俺は入ってみることにしたのだ。

そして、俺はドアノブをカチツとひねった。扉は普通に開いた。中はなにか幾何学的な模様が漂うよく分からない空間だった。壁で仕切られていない、謎の空間。

俺はおそろおそろこの空間を歩きに歩いた。5分くらい歩くと、また目の前に扉が姿を表した。

「なんぞ、これ………」

もう夢中な気持ちで、俺はドアノブをひねった。

そこは、普通の誰かの部屋のように見えた。俺は気になって辺りを見回した。

勉強机の真上に寢床のある、パイプベッド。他にはちっちゃいテレビの横にWiiが置かれているように見える。あとは、クローゼットの折戸があるくらいか。

「いったい、ここはどこの家なんだろうか……」

俺は幻想の中でも本当にいるのではないか、と思っていると、俺の目には見慣れたようなこの部屋の主、女の子の声が出た。

「ここに、誰か居るよ〜」

(じじく)

**第2幕**　ここは魔導世界です。(前編)(前書き)

謎の扉を通じてある女の子の部屋に入ってきてしまった大門(俺、テツ)が見たものは…

第2幕 ここは魔導世界です。(前編)

なんとそこには……アミティがいたのだ。

アミティというのは、おなじみ「ぷよぷよフィーバー」シリーズの主人公である。

なぜ…俺はこんな所にいるのか…  
アミティが俺に話しかけてきた。

アミティ「どうしたの、君？」

俺「……………」

アミティ「ねえ？」

俺「1つだけ聞いてもいい？俺を、不審者扱いしていないよね？」  
アミティ「え？『ふしんしゃ』？」

アミティは俺のことを何も不審には思ってもいなかった。

アミティ「とりあえず、こっち来て」

俺「お、おう……………」

俺はゲームでアミティはくどい程見たが、やっぱり実物は可愛かった。  
今の俺は…ある意味幸せなのだろうか。

アミティは俺を居間へ案内してくれた。居間では、母親らしき女性  
が何事もなかったかのようにお茶を出してくる。

「よつこそ、いらっしやい。私はアミティの母のロバート・コンド  
リアです。」

やっぱり、母親だった。続いて、アミティも自己紹介。

アミティ「あたし、アミティ。よろしくね」

母「ところで、お名前は…？」

俺「土岐大門です。」

アミティ「ニックネームなんて言うの？」

俺「テツ。クラスメイトからはこう呼ばれています。」

母「じゃあ、私もテツ君と呼びますね。」

こうして話は続いていった。

(つづく)



第2幕 ここは魔導世界です。(前編)(後書き)

次回もアミティとの居間での会話シーンが続きます！

第3幕 ここは魔導世界です。(後編)(前書き)

大門(俺、テツ)とアミティ、アミティの母がアミティロバート・コンドリアの家で会話をしている。

### 第3幕 ここは魔導世界です。(後編)

その後も、俺とアミテイ親子の会話は続いた。  
初めての世界なので、俺はしきりに質問をする。

…俺は心臓が激しく鼓動するのを感じ、自然に硬くなっていた。

アミテイ「そんなに固くなくていいよ。魔導世界のみんなはもっと  
穏やかだよ。」

俺「う、うん……………」

それでも言葉遣いが硬い自分だったが、アミテイの母も同じ事を繰り返す言う。

母「そんなに固くなくていいんですよ。今日からはあなたも立派な  
魔導世界の市民ですから。」

俺「はい、わかりました。」

俺はようやく了承した。

@@@@

俺は質問を再び繰り返す。

俺「ここってぶよぶよの世界だよね?」

アミテイ「うん。正式には魔導世界っていうんだ。」

俺「アミティが住んでいるここはどんな街なの？」  
アミティ「プリンプタウンっていうんだ。」

アミティはテレビラックに置かれていた地図を取り出した。

アミティ「キノコ王国っていう国なの。プリンプタウンはキノコ王国の首都キノコタウンの直ぐ西にあるんだ。」

俺「キノコ王国に有名な人はいるの？」

アミティ「個々の国の王女様はピーチ姫っていうんだけど、そのピーチ姫に使えているマリオって人が有名だよ。」

俺「マリオ・・・聞いたことあるぞ。」

アミティ「この国の南にはサラサ・ランドがあって、その東にプープランドという国もあるの。」

俺「へえ」

アミティ「そういえば、テツはどこから来たの？」

俺「日本という国から来たの。秋原町と言う所があって、隣町は大都市デンサンシティ。今度案内できたら案内したいな。」

アミティ「うん！」

@@@@

その後もしばらく会話は続いた。途中母は用事で出かけていった。俺の腹が鳴る。時刻は11時前だ。

俺「腹減った〜」

アミティ「どっか食べに行く？近くに美味しいファミレスがあるんだよ！」

俺「どういづとこ？」

アミティ「『ワグナリア』っていう名前のところなんだ。さあ、行こっ！」

俺「よし、じゃあ行くか！」

俺はパジャマ姿だったので、一度扉を通じて自分の部屋へ戻り、再び戻ってきた。

アミティ「さあ、行くよ！」

俺とアミティはプリンプタウンの街中に足を踏み出した。

( つづく )

**第3幕** ここは魔導世界です。(後編)(後書き)

アミティの設定が崩壊してる部分もありますが、ご了承ください。

今回は『ワグナリア』でのお話！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9338y/>

---

僕達の知らない二次元 第1期

2011年11月29日23時52分発行